中村俊定文庫
文庫 18
800

宮城県図書館

七夕後集

東我青陵撰

中村保定文庫

人そよ〳〵是棚機のこゝろかな　素槃

扇のうせをわすれたつ秋　ちひろ女

わきて子を思ふ暑さの取まぎれ　〃

月のかつらのもを離れたり　棟叟

ほそ立て小松の中乃新宅を　真仁

さゝ乃ゝひる濕る　股一引　照樹

手の音に先つ出されし小盃　芳汀
はるめきの迷る　灯　生乃影　おもと
うつるの逢へぬ釈迦仏の　可橘
ちりの学ぶ糸縷みしうき　よ孫丸
旅籠屋履に鎌倉折敷とは　野牛
著物乃襟の立て出こ後　雨山
ある雨よる月の足へ　香山
志のふ乃道れ藝も稽古　仙市

貝殻の中よ形母とよめり　雨暁
彩色つしき土産を伺ふ　春嘶
伺さちふよきく蕊の酒　微席
咲るまさめ如　月の聲　青隱

素碟一　ちひろ二
次一順

文月七日遊女をあはれむ

低城よつを迫舟を推しまして　素堂

ひとり恥ぢし淑まし浪　ちひろ女

蔬烏秋の模様やえんすきん　〃

茶を弄きよ出し新蕎麥　周行

腥き月の在処ふるふるり　〃

ゐるりと人の影ぼむいさ　青虎

鷹をぬ首ひき入もて畏（カシコマ）て　〃

孤衣乃袖も鬱る柳芽生　行

今一里乃孫八ぬるる帰く　〃

や絵てさひき笛乃塩梅　虎

きゝ孔くも馴染の景八坊主や　〃

市乃喧哨のひりる　晩鐘　行

鰐を夏のやつと泳ぎ也　〃

れあ〻こゝ孤を合す門ト出　虎

慄しや切火うちする鼻乃先
笑ひくゝよ情かゝり　て　行
むつくと花の伽する八九人
春のゆうけのめをゝ傘　俊

素堂一ちひろ二
同乃八まゝ隱七

たゝるゝ雨や今霽れ独　迄　素堂
袖をきる金の形合の糸　ちひろ女
萩と萩秋の心八あり乃めて　、
をりかへつよくまつ鳥　周乃
浦ゝそゝ乃上の月の味　青隱
八重むらゝ人を咲出る　正阿

[illegible]餘[illegible]昔かな　行
あらなくなる待といの字ハ　隱
逆すに俤元脱て打揮ひ　阿
敵の果を酒買よ　き　行
う礼[illegible]はひろけふき釣　隱
保う月を[illegible]独森の旗　阿
和無月あぢ月夜よ[illegible]　行
とこの[illegible]き水仙乃色　隱

下京や足よわ[illegible]る髪の崎　阿
[illegible]のやの[illegible]を[illegible]ぬ　行
我先と雪曉の[illegible]つり　隱
[illegible]の[illegible]の初[illegible]して　阿

素[illegible]一ちひろ二
因[illegible]五青[illegible]五
正何五

天上音楽

星合や古人の愛　隣　素梁

玉乃弦琴よかゝる川浪　ちひろ女

さゝくの錦を秋よかゝる人　、

桐のゝ〳〵投袖乃ゝ　吾三

月遊ぶ聚燭のさのほのゝる　輅外

四鉢供ゝ簪乃ゝ　月光

只ひゝ〳〵森ゝ雀八面白し　青隱

ゝしき事を綴る懐中　外

打ゝゝゝゝゝ元上る忘種　三

夢着てれゝ人あれハゝ　隱

痩(ヤセ)皃を頻ゝゝ火の明ゝ　行

松風かゝる竹の月代　三

蒔(カキ)様ゝ心ゝゝ裏ゝゝ　外

天竹遠乃道八違ふゝ　行

下戸なれば酒の代りに休しまよ　隱

写して見るまよ長い明り　文三　外

とちくへなわらちのはらめぬ花顔貝　三

きくめものあき春の明かの　隱

素礫一　ちひろ二

吾三　卯　輪外　卯

同月　三　青僊　卯

星の数をほくつき費の旅寐に　素礫

秋来るらんと志のあ　雅名　ちひろ

時乃百よ通の唄のゆるくて　、

花乃るところよ月をけを引　青僊

秋空きこの羽きの粒あり　正治

ちほの揺ゝ伝ふ川舟　松花

花さかぬ火宅の中の妻木とも　隱

おけの情を精進の端し　何

落書ハいつまで草の色よ出　花

すめの鬼も目くるほ乃　隠

浪人の刀まいら先よりち　何

霧乃中を走る髮ゆひ　花

夕月夜門ゝて別る冬搗　隠

膝をかすめ半時の閑　何

七

近道乃工夫おつゝぬ位ー山　花

唯わりゝろき翔りのそゝ　隠

みちのめや今年八あき京の相　何

草鞋そゝゑくちもの入口　花

素碌一　ちひろ二

青陰五　正何五

松花五

さをはたの飯きく宿の芒うゝ　素堂

白綿付るる秋乃思うせ　ちひろ女

人ちに夜重ゆ家殆りて　〃

おろと醉の醒は斬寒　化雄

紅ゆゝけ心の寄ぬる所に　青隱

誰ゆもゆゝて多ぬ荒駒　正阿

むつうと寺へ紅る兄弟　雄

何ハゝあれ生つきぬ人　隱

行燈の暑き也をとゝ乱し　阿

伊勢と日向の小順ゆゝ　雄

義ゝ多世ゝ捨りきゝ　隱

乃ゝ起ゝ起ゝ起ゝ起ゝ　阿

あきほゝ菖蒲ゝゝ月夜　雄

寸夜乃出をちやむ弦　打

隱

さく紀の音も疎くる脚気病　阿雄

ひそく戻れる花のかや白ち

自ラ耳よはさくるもふの旅　隱

砧にうちをそ免る蝶く　阿

素槃一　ちひろ二

代雄五　青隱五

正阿五

小町うか梶乃ひと葉のあるし皃　素槃

むらかり八皆をくれ下　ちひろ女

月八ゆ雨を学る栄の戸　石羊

簑出さくれ　青隱

まのよりかの八和る風の末　ひろ

ほくと見するあうつきの鐘　羊

さつくと過る年の山蔭　隱

夫婦中らき宿乃松ヶ枝　ひろ
僧人の打ぶを志はし目ゐ　羊
無言ゐ多ゐ夕暮乃隙　隱
破垣ゐあふちの窠をつゝ蕣　ひろ
ゐき鼓子花の立ゐ　羊
月言を手のむ扇の月の形　隱
只胡盧〳〵と舞く　ひろ

十

をさ〳〵下総唄を習ふ　羊
乾癬の癖の出ぬゐ　隱
疑ひ〳〵花の弓しの面白ち　ひろ
ゐ〳〵穢を歸るゐ〳〵の世　羊

東張一　ちひろ六
石羊六　ゐ五

柳橋ハ橋をわたる　傳受弘　素葉

諷めを写せ　なの川　長（ナサ）　ちひろ女

盃にうつるふ影も紅葉して　〃

玉より白ようら枯乃家　奇峰

そしらふりを持　秋の月　韜充

たちくにんの名を四ふ　青隱

千めハ先つ首飾のゆるむん　峰

青森の年よさるる投かし　充

尋てる洲の種をかうり　隱

細（ホソ）き心千性乃舟頃　峰

俺人ハゆすり起を不機嫌さ　充

茶の退屈をうちのけをく　隱

月よさに軒の菖蒲の新や　峰

我をかつみの根をむるとを　充

貧しさハ好む処よ有あらん　隱

酒乃相手ハ唯二人哉　哺

蒼天ハ洩らぬもうよ花ゝ咲　充

遊ひくて捨るもの法　隱

素堂一　ちひろ二

亭哺五　鞱光五

青陵五

山家

住まゐ志るは七夕の字の一字二字　素堂

樵の笠ハ月をわすれぬ　ちひろ女

みのむしの心を何と啼やん　太根

旅の宿の揖をつゝあき　青陵

訪ふ門を静めゝ月哉　鞱光

ぬれぬ袖乃めつらしきあり　亭哺

鉢の内もゝを志めすを洗　鉢　菓老
持て海苔　きぬ〳〵の筆　旭女
あゝ足も泥よ酔さるおもあり　都路
夏草のはゝの白い多なる風　東雲
猫はゝてあゝさ白ゝ仮枕　曽牛
長居いせゝを切る　板橋　文草
晩ゝ乃出よゝあゝ月の秋　錦江
洞ゝゝあゝゝ芙蓉　甲五輪　龍児

捨〳〵世をわすれさせぬ八里神示　たま女
股のゝゝ寄ゝゝ夏ゝゝ　ちひろ
物い〳〵ゝ云ゝわと寒き雲有　太根
追ハぬかゝつのゝ逃ゝ　〳〵の　素俳

素孫一　ちひろ二
かゝ根二　素俳二
次各一順

七夕詠

朝日影牛車のかげ　素堂

すゐく尾ゑの甲斐ありけり　ちひろ女

誰ゝ為に蜜柑の色乃黄ゝ哉ん　〃

うゑひとつを二ゝに置く　若人

籠（タカ）井の餘て宮き桶の月　青峰

よゐのちとりゝ門へ鳴らむ　人

酔醒ハ蕎乃原しきおもれ　隱

ゝゝゝおもゝあ身の代の　紙人

あの鐘ハひつゝの人のかゝち言　隱

ゐひ切つゝ発る　古〻　痴人

涼しさハ悩ゝ隣ゝ羨し　〃

五十ゝあゝて　出ゝる　愛〃　敬隱

ひゝゝせゝ日ゝぬ顔ハせちりゝる　人

菊乃宴の　ゐ　饅〃　ゐ　隱

中ほよ嘶の消る　虫乃聲　人

矣うて助る　半ゆれ番　徒

油断して為る躾るく我　奴　人

春のちらるの人ゆる美らさ　徒

ちるもろ〳〵上々や　月　数寄屋　西吾

素堂一ちひろ二

若人八青隱　七

戀

ふとこ伝よ巨燵のゆるれるか　船蒼

春すゝ林ーきうちゆや辛夷さく　青牛

あやかりと寄るいとる乱ゆる　風也

雨の秋も梅八咲るの寒忘仏　袁丁

人めるや羅ゆ八宵さる　東渚

曉やゆれぬ聲を啼ちる　子文

九〳〵ぬ月めもあり後の月　弄琢

いつ山を陸てや麻のよるれ足　和暢

やへるさの宵を桜の科そうし　葛窓
雨の夜や杉ぬハ石乃聲そかな　春町
世俗よりもあ人ありて春の夜ハ　荷尚
旅人と分りて桜のもつゝ取り　李渓
七格やあらさ〳〵踏くらの月　蒐月
若水よ春のはゝの定めなり　不倦
穀菌の癖よ時雨をひきよせり　若人
陽炎の香爐よのぼる彼岸ゆ　柳亭
芒ゆ実ハのる抱ゝ后乃月　麥賀

楷の火や七雨よ暮ハ祖父と　姥　湖月
釣月と名の負ハ也や秋林し　閑乃
ゆゝもの乃やゆ坂のあり　故可瑞
蟹栗さくや寄ふ家のとほれゝち　春明
狩犬のやゝ走ゆるゝ　石羊
白魚乃盛り宮し三日乃月　泌香
竹焚て下る舟あり後の月　東嘯
ちゝるの来る自も同し文ホ立　葉堂
しゝるゝや大根畠の一ゝ　馬蓼

ちりやおちふる藤さき回　鯉尾女

更衣春の心の砂ぶけり　めと女

子の紫ふくれて眺る故人　素糸女

裏戸ゆ〻のぼる山路や桃の芯　ぎく女

学の壺かぬしとて秋乃る　ちひろ女

古池る梅ふみやぶるかな　七女　おせ女

かげほゝを遠八へてありく踊　少年　あさち女

暖のあるる山乃小ロうお　故人　亀三女

春の水増て流て花ほろや　ぎらた女

玉兮

巴号

おゆか女

義谷

岐山

稲五

止丘

おほ女

春明

雪柳や折ふ〻戸八戸ゆ鍵る

菊造る手を白きくの宇ゆ

雪柳のくやかへ〻きの風ゆ

ふるかさ花ゆ人ゆてさの峯

ち〻ゆやのひ〻る〻る芝乃上

形蛍ゆも雪と人ゆ乃下

翌日の日和ゆ梅の咲ゆ乃

すしさやとち〻向てゆ音

踏ゆけて人八風あり夏の中

引ゝき尺せて動ゝ沼の鶏　塊翁
山舊や日もとゝ〳〵家のかゝる　足彦
梅柳春二節の堤〳〵柳　吳山（ナコヤ）
待甲斐あゝて去年よ似る牡丹咲ク　青隱
逸乃言れゝきわを五位の声　ゝ女
不合切つてゝゝるて金や子の上　蒼虬
つゝしぬゝ紫つゝきや芹茹　宮姥
灯火の上ゝて来ゝ秋のゝゝ　神七
さゝゝ戸やねハちゝゝる音ゝ夜　臥酔

萩をゝて立ハすゝきのゝゝゝゝや　久臧
若竹や家ゝつゝゝよりゝゝゝ　如髮
ゝつ猫ゝゝ世の人ゝゝ通ゝし　鉄斎
柏ゝゝ柳ゝゝゝぬゝゝきの柔　韜光（ヒカ）
本やしや春の上ゝゝあゝゝゝ　奇峰
金ゝの野ゝゝゝの浮世ゝ香　東ゝし
ゝゝゝぬ夕へを萩の花　ゝゝ　文子
立共ゝや春ゝゝゝゝゝ音　都彦
盆の月月のゝゝ袂　少　春住（ヒカ）

ほとゝぎす花の盛りハせまり行　　紗江
閑古鳥なるや、深さあの瀧　　旭弘
もゝ賣や世よ世の秋を解て　　菊花
んめゝの延よとほる白髮ゝ　　本根
衆乃音の一志まりして行ふの月　　虎白
あゝ月や色々と色ぬ茶の数　　仙路
てゝくと火の燈へてあるほの月　　丈六
戸口ゝ脇もしまる柳一ツ　　曽南
桐の葉や尺よ拍子一つ　　木口

菖蒲菖蒲ハ私てを久し紀雪ハ　　百山
糸ぬ春まと出ひ集色て行ふの月　　鬼國
仕まりのちゝハちゝあゝて芒の穂　　一興
面白や松ゝ宴山子を向ハせて　　樂乎
花影人よ人影花よさゝ夕へ　　珠三
月ゝ雪よ本居しをまる供ハ　　吳山（シナ）
咲めありちまのるの茶ほゝ　　文と安
花ハ疾くゝて来て親よ語ゝ　　文琴
ちる花よ雪ぬハ月のゝ故ゝ　　梅旭

夕虹のうけさる竹の若葉哉　三化

萬歳を春とすると思ふ男哉　微庵

星みる形あるて酒一壺　仙市

あさうねをよんるやくさぬをあめ　阿彦

送り火の景や床槿の赤はつき　正六

月入さる白大うこれ形しき　芳汀

あ初て膝を出さるる小　米丸

初てあやそれを撲ウタるか　秋夷

学をかの星よひひて白し　故田舎坊

俎乃鮎はる白しー青魚比須　八十嗅　晴

かうつる雨を離るる塔のひねを　照秋

大きよあすをあの月ひ小　魚河

春うや言て入る然ハ言の月　故秋中

市中をうるよまる秋小　常矢

宗砌や月ひしぬての二番　ふを

雉うあよ山高麦のそ小　雨暁

生業の牛よ任する春ふ小　下猶

形つやれよ月のふをみる　雨山

苔の戸乃雪とけしら滝蛙　有や
盃のあゝ置あしきぬ　千搭
初花の久しきまぬ天の川　春嘶
包丁の刃ゝ冴る新の風　野生
氷ゝ戻りて門の杵月　キ月
学の初めして音ゲ花の山　東峨
旅人の戸をさしまゝの稚ル　牧士
七つ歌やまゝ有白の星の宮　鱗長
名月や里ゝ遠ゝ川の色　ゑ三

松小まつ春のあゝて子のゝ外　三鈴
てゝのゝ手ゝ菓の枝ゝ　香山
尋ル八酢ゝ柳ゝ紅の葉　化雄
大菊の高ゝ咲ゝ咲ゝ　鬼王
振ゝ戻ル谷の光ゝ　喜有
菓の果や矣ゝ世ゝ　芳正
叢や風ふゝめく蛇の衣　樹木
竹ゝの脛ゝ田ゝ　茶山
杉の木ハゝ古ゝ紅葉て　壽得

人聲の絶えたるや偶迥し　不意
やつれみつ二秋のあるや蜀帝魂　漫々
きたるなや貴(尺)侯の隙すぐる　曽人
骨の骨折るこゝろ方の秋　紫々
眠つても居られぬ樹の仮小　野叟
秋るや色青のうるき菴の有　恭敬
うゝ不あるとうしる樹の月液　騰舟
地獄やさつきとうる稲の出来　嵐外
ひとつ赤の青や卅よ仕る歌　灌丸

さく桃のすれは糠ふるり　松乙
苦もせぬ寺の日ふとゝ時雨　光躬
みゆかるゝ仕懐の冬の月　和達
静さと人と秋のあるよあ事　為一
学の寺の住まる居ありうか　有臺
苦るくるの狩きもんめの茶　毎角
白雪のあらいよゝる吾外　尺宋之
小粒ちとよるを田あしの歌雨　桃候
ちとあめの艶つあ春の雨　恭之

名のなうぬ人の来るさうぬ櫻
刈ゝ志てもく咲　塚の桃　庄山
ゝるかハゞ雪の上なる春の風　湛庵
春風や吹下を扇のねるめ　百丈
毒もあるあゝりうさゝる巨燵　大兆
菊の香や日蓋をゝるゝ志ゝ　度江
萱原や雪のうゝぬつてゝの川　尺物春
小ゝるゝ夜のぬて来る蔦穂　一虎
ゝかゝと雪ふてぬ八梅赤ー　富月

ぬる雪や雪ゝ雪ゝ人のつけゝ尺　冨雪
二人ゝてきおのえゝ雪ゝて蟲さく　冢緝
満ぬのみゝるゝひゝ秋のゝ赤　維寅
雪ゝるゝるひゝゝちるゝ雪ゝ梅　之月
白菊や無百膳のかけ虎し　草烏
月(菊)て二色ゝ雪ゝゝゝゝ　业尼
釣ゝるゝきれいゝあよ長　三柏
行燈てゝゝゝ桜ゝる秋雪の香　禾木
水無月やゝゝ秋ゝ雪ゝ　南瓜

元れる風のすゑと霧よりも　素白
さびしさを咲やて行すみれ　之俳
象潟や雨もふるかに世や奥山に　苴矢
萩乃宿禁るるのくて降　棠舟
風ぬけ行すゑ歩て秋白し　蟻岳
抱篭のうしろまみやかしし　藍外
うろくと麻生畑や雉子の雛　穂尺
正月よりしぬ人の紅葉ぶ　不争
世の中をいさめる春のひとふし　巫映

学の戸ふ来るや大きみそさ山　可布
ゆるのつめつるよりほとくぎす　左流
静さよ心をうるさくさ　栄雨
掃ゐや八尺やうぬ菴の煤　青葉
風宅一冀の軒のたし柿　日雨
学の色を垣結てわらふを　以存
勝敗の為ふ人るや軒の子　一河
むさし野やつるよりたの玉　平二
学の峠て行ゐ廣野　正司

みちのくの志のぬくもる榎本小　泥尾
春の雪物欲しやあるまあ[illegible]　米渕
寒霧よ八ゝ[illegible]き物よ芋の葉　兼太
菜の葉や物のまれて二夜降る　浦人
ゝよりちき物ちしら春の月　李道
仲垣の内よりとやる蒜　久米　椿堂
主ての友よ八ちをき水鮮小　馬梁
花ちゝやちゝぬそもる陸ちゝき　蠡本
霞む寺をこゝるゝ人神よ添心　芽丸

草の香の小よ来るる数そ明あき　土縄
糸山乃麻ゝ矣てゝ霞ゝり　樗白
正月やゝる鳥よ赤の多　土渡
農のゝて正月ゝする柱　小　学笠
夜乃ゝよ麻ゝ[illegible]き物をあし　寥松
酔の前よ志ゝゝ[illegible]ゝ　護物
初雪や[illegible]ゝ降雨の中　孤山
めゝゝ[illegible]宿(ゝ来ゝよたゝの寺　茶里
元興寺ゝいてゝ[illegible]ゝ小ゝ小　椒壽

折りて筆とむるあるべし　南井

御連句を流し春や一ゆき　一蕙

かつらもよもよ芒の一本も　ひろ女

鶏の枝指八掃おそふうんめの茶　菊塢

菜の花や生れぬ園　燕市

夕べはあつて明るほしたの茶　不玉

苔の塚よ仏を門の秋　たよ女

橋もの陰かてみるかもの　嵐兆

蛤を焼くも孫うつ秋　夢南

二人して立ちれば柳　曰人

かぶく来て拾火のまゝ春の月　乙二

馬糞かく寄かよ東海道　杉长

石臼よ家ともつきこまるる　移老

さみだれや義かあれしよ人丸　かつみ

秋風をハ年前より起るう　金提

月をふ涼よあるや春の海　柳翠

深山木の其浮山木よ石の月　廣陵

家のまとしゝと文徳しかまる　茶彦

春のきさらぎ寒し樓咲　魚文
ひとちるやそらに桐の一葉はも　平山
行燈の影ばかりとし梅の花　一草
白んとやよきの世を俺ら居　宝弓
蒲公英や風のふるを京にして　楚雀
山のんめさらくのさふ茶乃ら　石舟
小畠乃家あふつる家ふる　原水
拾ふ子の膳よ春ら浪妻の中　暁烏
うしの春のもれ夜下蔭の薹　其翼

かけろふの妻よさひよ獨活葉に　心非
ふるしをかまてせもるるう郭　詠帰
まるくしるや蔭のかるしも　船頂
蛙の妻ふつて塊遠夕へ　珉古
ほるふ人ふ秋のある蓋うち　太節
甚もしのひ夜みる花もか　車両
ひきそふる暗るをてみる門田か　太橘
葉蔵とかりて海かき思ひう郭　茶静
行きまの乃張ちわれつ花よ　麦湖

寄書の眼よりえつしや　冬の雨　丁丸

窓乃明り　梅のあるよりはたらく　史千

こゝろんてゝ　梅よりぬるゝの月　海玄丸

うゝひきの起さはうの茶の赤ゝ　仙骨

蠶蟲〻〻　葉紫乃中はゝ小さうはき　約谷

卵のゝよゝ新蝶の立　ゝり　祚焼

五三牧名ゝ不足て　表乃　月　芦街

毋造他ゝ蜜の長き梨の茶　應く

姉〻さを人ゝ　織る　ゝ　萬雨

拾ゝと本草ゝ　春の雪　星谷

人の出てゝの日よりゝ　鶴亀　洞く

片ゝ月ゝて　差〻角田川　薫岱

遊巡〻て　歌〻　白度

独居ゝ　川　谷樵

白魚の味ゝ　一京梅　呂律

蝶のゝ芝を　庵ゝ　古玄

子知小巻の杉ゝ　新　芝陵

又あゝ　乙　玉光

花桂涙のあとしハをるまく　雨堀

天の川あさ〳〵かゝる皆しは　田年

御簾を通す月ハ　柳平

叶そこの気ハ月を宮初ハ　青以

梅人のえて通てたゝ裏の梅　裏梅

立ゝ手を灌仏のそのまゝふ　原三

日長〳〵て姉しきんめの形心　輪外

古へを愧る風鈴やさ紀のまを　楽女

菓さゝやゆぬ戸あゝむつまき　吾三

初雪の大雪ある山家ハ　其鼓

さつるゝ雪花の俤ゝもつゝ　万伝

お葉ちる汀や冬の道きる〳〵　正阿

秋ゝの見ゝるよ小春うせ　多ゝ

あの上ゝゝる物を初時雨　白糸

雪の聲ゝ世話しきなをハ　栗支

秋の末を黄ゝゝ咲ぬをゝ　碩布

ところ〳〵の里

投やりな鬼つくよ桃の京　青隠

予幼而好風流、慕阿叟之教也、以虛粟為本、兼臘猿蓑曠野之於冊子也、三十年于茲矣、斬至知以所俳諧之為俳諧、與以所正風之為正風而已矣、夫俳諧者、則俳諧而詠雪月花以喜心、且令人易解之辭也、正風者則正風而正風儀、後風俗之義也、以之觀之、俳諧自俳諧、而正風自正風也、然則俳風二義、不可忽也、于茲信陽之高士、素蹔翁者、詠重七之佳句、有數十章、句々皆金玉也、岐城女史千尋基翁句、是亦吐及數十章、所其續亦玅々也、真堪感賞矣、於此乎予與浪華之禾木、選其可者、後其萃者、校至二十韻、於此令同盟續其後也、然而以翁為上番、以女次此、或

三或四聯綿連玉終為一小冊子
公行于世以欲烱乎冥行徒也若
夫好事子繙閱此集而觀正風美
其何異乎披雲霧而覩白日不亦
快乎時文政卯辛巳暮春東武之
青隱物初校